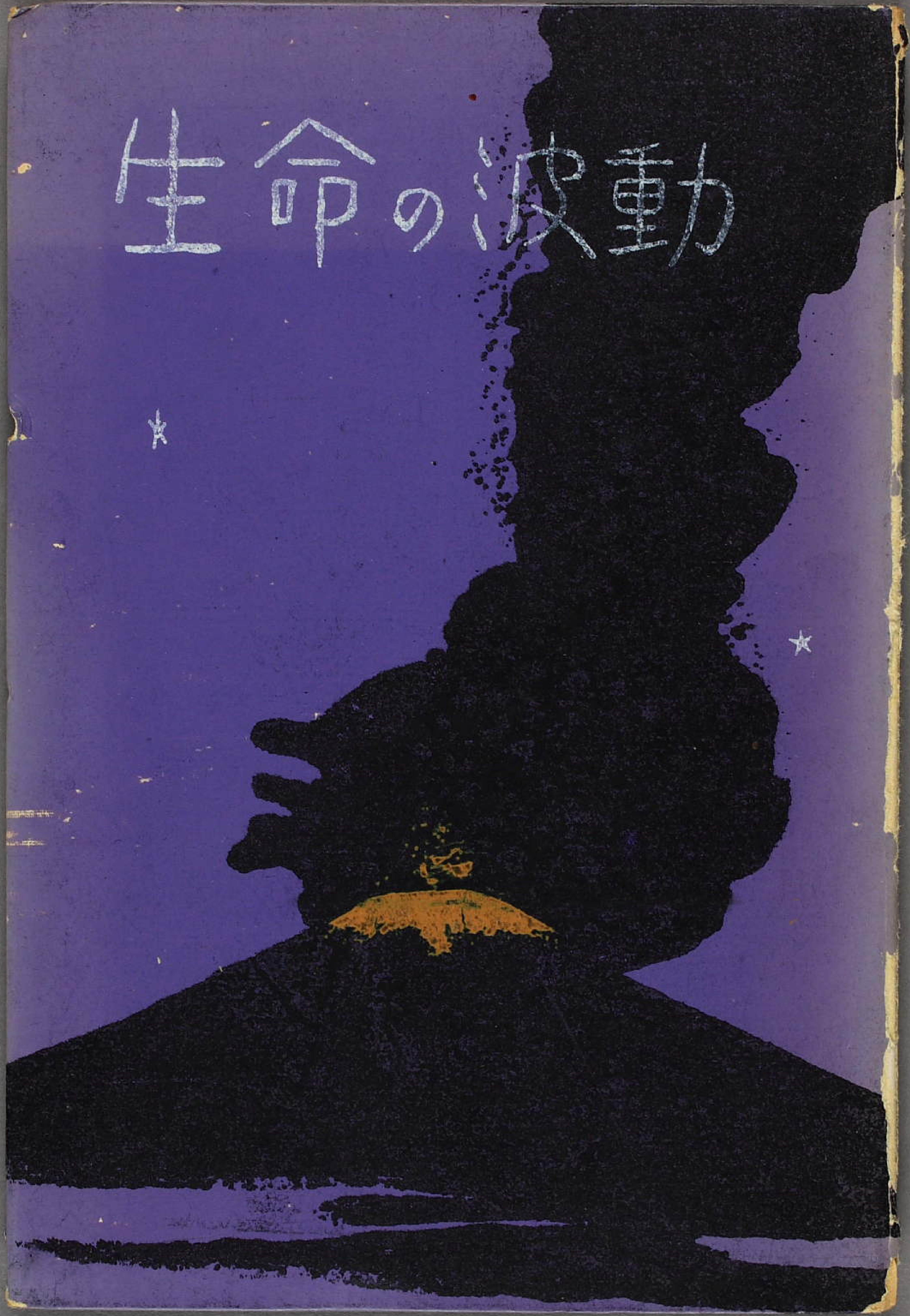
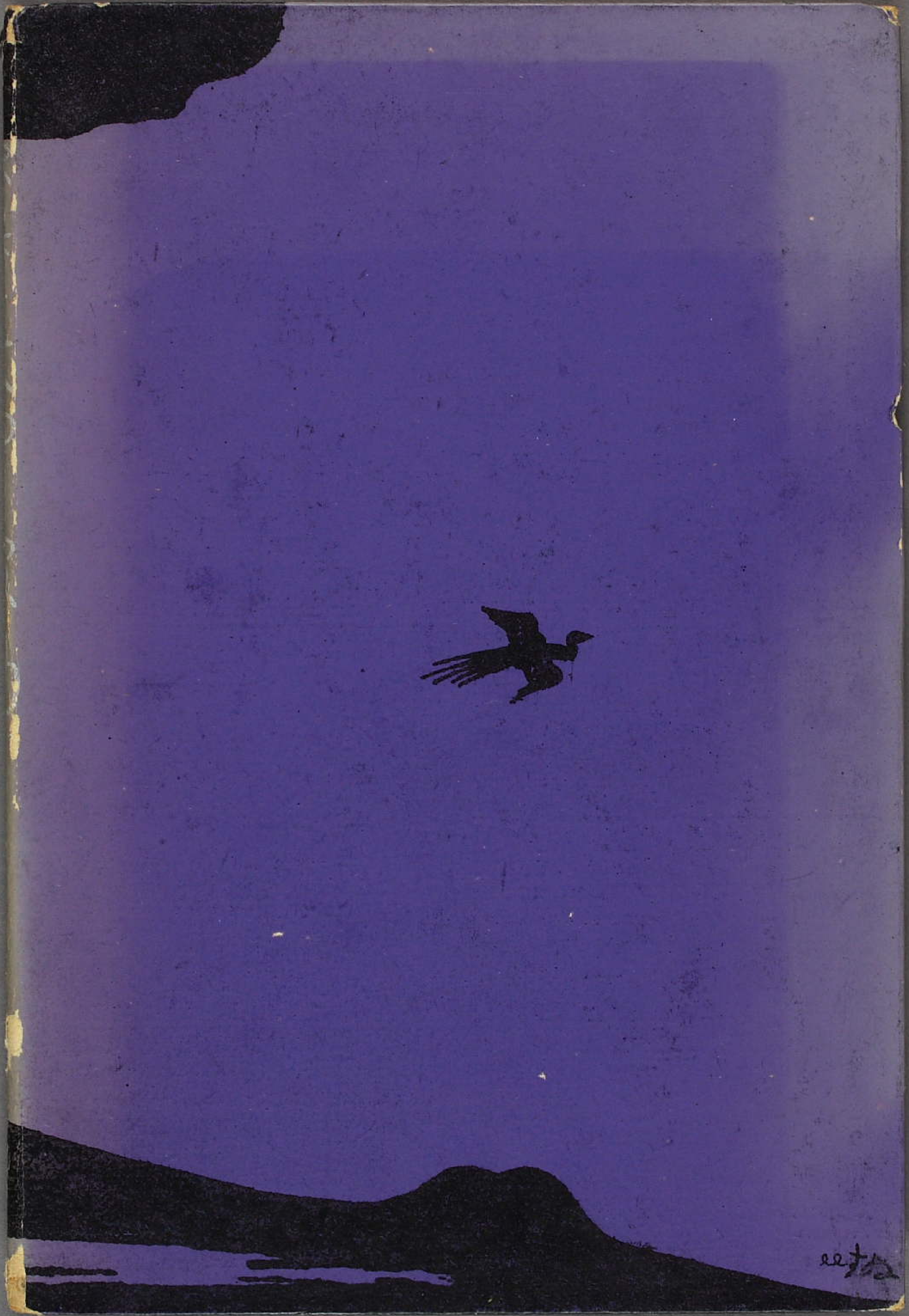

生命の波動

歌集 生命の波動

杉浦翠子著



歌集

生命の波動

[illegible]著

歌集

生命の波動

杉浦翠子著

大正十年撮影・前列左より，森田恒友，齋藤茂吉，阿部能成，今井邦子，中村憲吉，折口信夫，中列××小宮豊隆，杉浦翠子，岩波茂雄，岡麓，後列××平福百穂，島木赤彦，古泉千樫，

目次

昭和二十六年作

春の飛躍　一

夏の都会　九

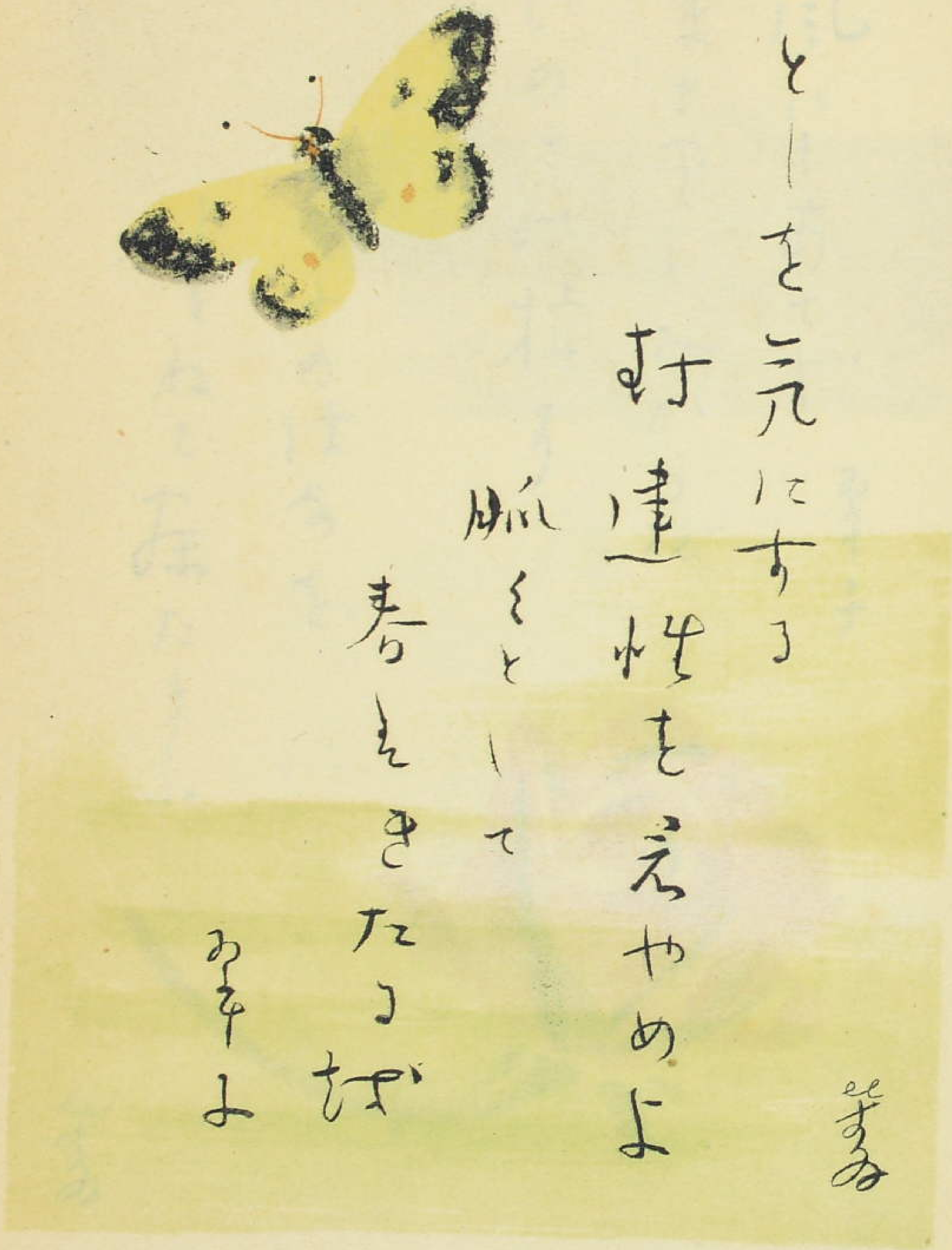
山荘生活　一四

『をだまき』三十年祝歌　二六

貧にして詩あり　二九

昭和二十五年作

虫の音　四四
時代の風　五八
昭和二十四年作
零落自画像　七二
死が解決する　七九
春恨めしき　八三
生きねばならず　八七
昭和二十三年作
昭代無情　九六
陽も土も　一〇三
夏草に夢なし　一〇五
浅間の秋　一〇九
昭和二十三年作
雪魂賦　一〇三
昭和十三年作
福澤桃介追悼の歌　一三一
あとがき　一五一
思ひ出の寫眞　巻頭
非水装画、翠子歌筆蹟　四葉


としを気にする

風にもあてず
まもりしみからだ
ひのきぬ棺り

たけ子

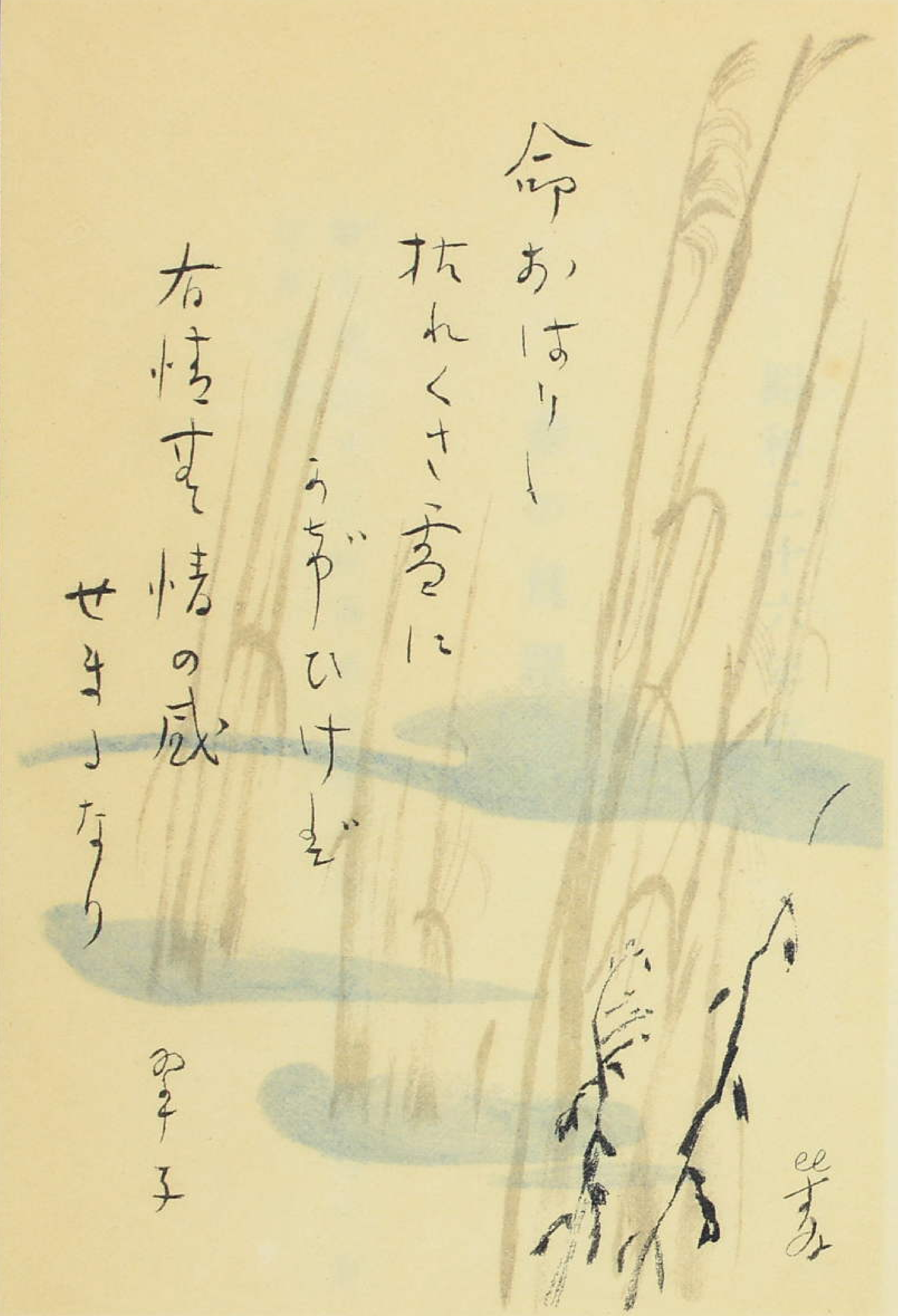
百千のはるを
しとねと寐たまふ

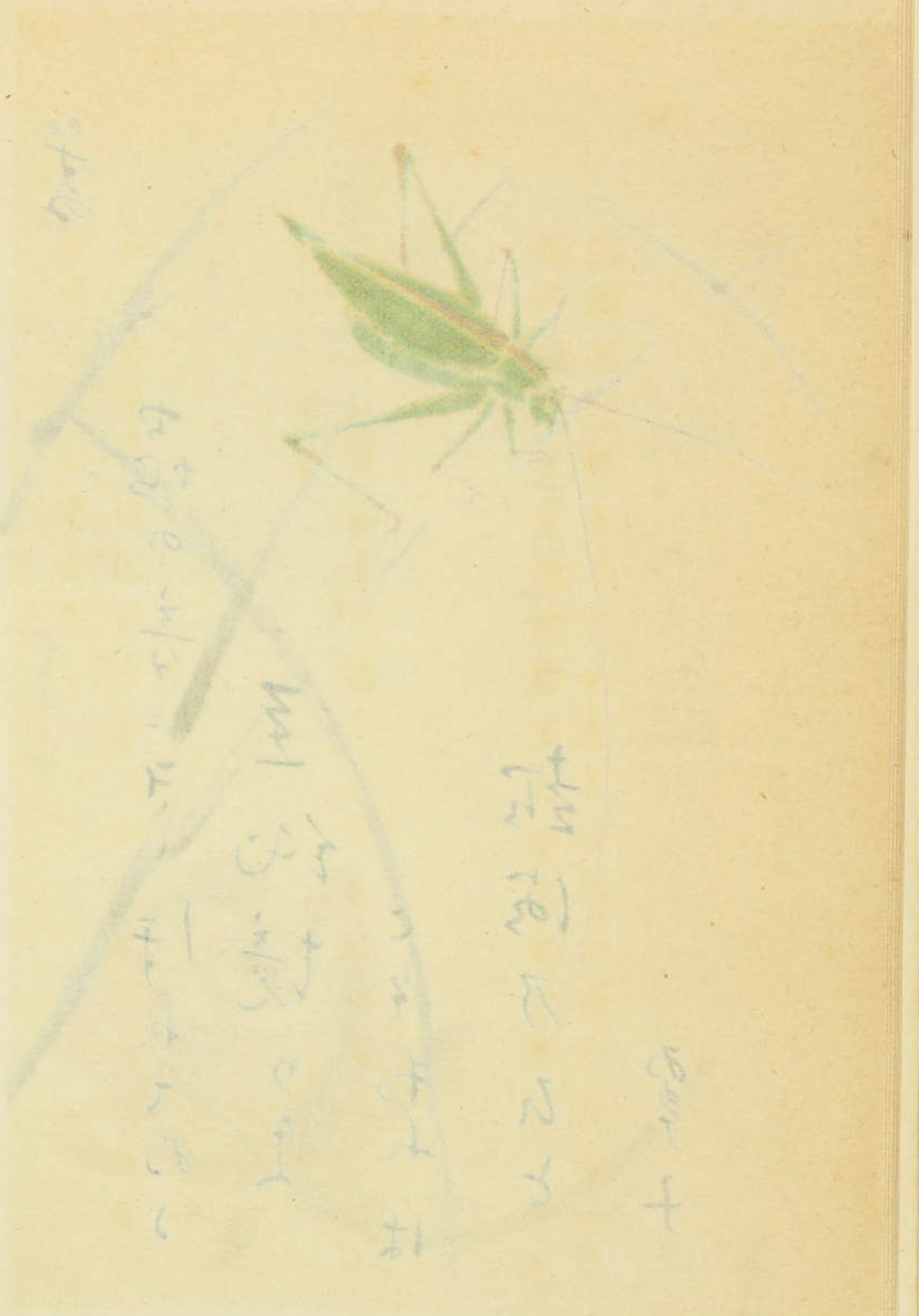
すゑ

すゐ

ちちの声にききほれてゐる
至純境りを
こそわれは
超俗乃ひと

みや子


命おはりし
枯れくさ叢に
おぢやひけど
有情すて情の感
せまりなり
翠子



昭和二十六年作

春の飛躍

齢(とし)を気にする封建性を君やめよ脈々として春
は來るを

ふたたび戦ふことなきこの国の春の光を額にうけよ

ひた土にけふまた青む草みれば大地ようやく熱しくる春

ふきおこす炭火のとびの火花にも我の呼吸のさびしさに触るる

なんの飛躍ぞ薄羽の蝶が飛びゆけり早春いまだ花揃はぬに

思ひだす人もある身に春は來てかなしきかげの蝶を目に追う

一枚の葉書の表裏にかく文句見栄も飾りもなくなる生活

形式のごとき返事を君よこす春はいつまで人生になし

をみなごは老いても枯れても人こひし多情多感の人生受けつつ

横降る雪は疾走してゐる自動車を目がけ追つかけ渦巻き降れる

街上の雪浅けれど青春の人は時代の足跡つけつつ

時代に古びし我と思へど街上の雪を踏みつけ踏みにじりやる

持つてゐるパラソル開かじ頬に髪に春ささやきの牡丹雪降れ

群集の顔また顔を睨むなり時代に古びし我が
白眼視よ

生存競争に我れ負けたれど敢然と笑つて死ね
る最後の勝利を

〵俗の世に俗と交り俗に栄ゆこの反省を幾人が
する

〵なんぞ目に虚空乱舞の雪うつす我にも飛騰の
心起れよ

雪片々大地に近づくその瞬間とらへし闇に明
暗ありけり

雪片は時に乱舞に見えながら整然として孤々
の降りかた

時代の寵児は死のくる事を恐れてゐる寵児と
いへど寂しさがある

戦前戦後と時代の思想は変りたれど我が理想
主義は一貫してゐる

我もまた春の自然児手のひびが薬もつけずに
癒つてゆくさへ

夏の都会

電車ホームにとまる瞬間あくドアー躰臭むつ
と夏服ばかり

たまさかの外出を憂鬱車内にて白衣の人の苦
情をききつつ

白衣なにか寂まき姿に見ゆるなり外出の人の美装の中にて

白衣の人の苦情は日本政府がきけ我は一枚をただ渡すのみ

安っぽい人道主義と思へども白衣の人に一枚を渡す

白衣の人と我が乗(のり)合せしも他生の縁人間社会に孤独はなしも

街に吹き立つ風塵よりも一枚が白衣の人の箱にたまれよ

訴へれば皆人に聞かるるものならじ白衣の喋舌停車前にやむ

腕も脚も露(あらは)に出してをみなごの生きむ意慾に
マロニエの風

レースかかる胸に双乳(もろちち)ふくらませ異性征服の
目づかいあはれ

天の成せる口を紅にて塗りかくす女の虚僞は
あはれなりけり

着ることに食うことばかりに人生を信じてゐ
る人銀座を楽しむ

人間が人間を見にゆく銀座なり用なき人の漫
歩に賑はふ

山荘生活

朝日夕陽を畳に踏んで山家ずみ陽に馴れなが
ら時日を忘るる

山家ずみ時間の束縛あらねども陽の落つるさ
まは障害なく見ゆ

天地ひろく麓が原に住みにけり蝶は窓より窓
をぬけゆく

重いおもひポンプ汲みあげほとばしる水こそ
我の力なりけり

夏はすぎぬ啼きかけりたる杜鵑ぴつたりと啼
かねば帰らぬ思ひす

切るやうに夏を冷たき水飲みぬこの感覚に妥協はなしも

どんな苦労をしても死にたくないと農夫がいふこの自然さを打つ言葉なし

昂奮せし降伏調印の日よいま冷静なる講和調印を思へ

五年は流れながれて昂奮軟化す降伏ついに講和に至りぬ

忘れぽい人の心に涙が出るよ自分の生涯自分が忘るる

国と我となにか別々に考へる講和の恩典しみじみ知らねば

講和すなはち減税か増税か小さき国民の考へるところ

あんな所に燈がつく見れば家がある別荘ならむ裾山腹に

山上のホテル明るく燈がついて空中楼閣夜天に描く

目下なる沓掛の街に燈が点々山麓とほく闇夜のひろがり

浅間山をめぐる無数の星みれば稜線くろく無数を切りたり

夜の色にも天地のけじめを天は星光（かげ）地（つち）は真黒く浅間が填まる

何の宿命ぞ浅間は常に我が前に悠久の相を見
せて默々

片時のまも我に惰眠を許さざり究めよ知れよ
と浅間に挑まれ

浅間山を絵に描いてゐる我が姿勢沈默なれば
蜻蛉とまれる

人を怖れずさりとて親まぬ蜻蛉かよ我に止ま
つたり離れたりして

絵をかいてゐる我が傍に農婦來ていくらに売
れるかとの質問

朝の山は紫なりと我がいへば農婦初めて気が
ついた顔

男爵夫人といはれしひとも女中なしあなたも
私もと立話する

勝田主計の別荘馬方の家となりピアノ聞えず
馬がはなひる

藝術論我らはすれど大方は空想ばかりの生涯
にて終る

何の爲めに学問せしやと書をよみて書を投げ
出しぬ答はなしも

文字は知らねど俵をかつぐ農婦らの生活力に
我らは及ばず

持てる物国に捧げて我らこそ名誉の貧よと語
り合ひつつ

親讓りのダイヤモンドを捧げたる忠良の民は
みな貧に落つ

我が友は身の上相談引受けたり我は厨に詩を
拾ふ身よ

誰がこんなに散らかしたかと厨見て忽ち逆襲
の笑ひが起る

敢然と貧と戦ふ学問と戦つてゐる人もある世
に

草に生れて草色なせる草かげろふ悲しめる我
になぜ現はれし

幾人の蝗捕り去りしそのあとに飛ばぬ蝗よ命
がありけり

『をだまき』三十年祝歌

中河幹子『をだまき』の花を咲かせつつ数多
歌の子にその香したはれ

三十年世界変動のその中に『をだまき』が経
し歳月を思ふ

『をだまき』の花はむらさき優しけれど貫き
とほす一念の力

三十年ひとすじのみち振りかへり今昔とほけ
れど現つは健全

講和なりて新日本の生るるとき歌誌『をだま
き』のかかぐるともしび

三宅克巳氏恩賜賞受賞を祝す

君といふ画匠ありて真鶴の波の光はとはにかがやく

貧にして詩あり

冬の朝しろじろと立つ我が呼吸に虚偽も虚構もあらざりにけり

いかに暖衣飽食の人も霜のあさ吐く呼吸白きに虚飾はなしよ

今の人百年のちには誰もゐないこの寂しさに愉快を感ず

会費出せぬと書かずに病気と断りの返信を書いて憂鬱にゐる

やつと生きてゐるだけの事あの人に逢ひたいなどとは心の贅沢

友と立ち寄るカフエーの拂ひは我がせしが今は出來ねば友と歩かず

あなたをおごるのは失礼なれど今夜ばかりばと云ひたる人よ今はいづくに

エプロンのかくしの中にマッチの軸こんなものさえ捨てない生活

炭屋来て炭切りゆきしそのあとの屑炭拾ふかほそき生活

縫つて貰つた洗つて貰つた五十餘年の習慣ぬけずに洗濯溜める

厭だいやだと思つて縫つたこの着物もう、袖付けがほころびてゐる

寸法にて縫へる裁縫をばかにして頭（あたま）をよそに走らせ間違ひだらけ

三越でぬつて貰つた着物をほどき急所急所の縫ひ方しらべる

文学少女にて針を嫌ひし罰あたり針に刺されてまた血を出す

おちぶれば我ればかりなり老夫は一流レスト
ランに忘年会つづき

貧しくなれば妻は婢の代りをすれど妻には夫
の代りはなしよ

旧知旧友のことなど我に問ひ給ふな生きてゐ
るさへ感激はなし

食へぬ故の自殺ひんぴん自殺する貧の程度を
考へてみる

我にも出來ると勢づくものは下水掃除薪わり
などの徒事ばかり

一本のマッチをさへや惜しむ身が落葉たくと
なればずんずん使う

兄の形見の縮緬真綿の布団を着て貧しき我が
夢結ぶなり

破れ畳に花が咲いたやうな豪華な布団これで
死んだら貧疑はるる

厨すがたの我を見むとて手拭ひをかぶれる顔
を鏡に見るも

裾の破れに引つかかるものは土瓶のつる茶の
間の乱雑けとばしたしも

運動不足を恐れてセパート連れあるきし今は
散歩の時間などなし

はしためが溜めておいてくれた小切の箱よく
も盗んでゆかざりしかな

婢（はしため）が帰るといへば泣いてゐしそんな涙は時代
が殺した

風邪ひきても厨に立つ身よ声までが貧乏らし
くごほごほごほの咳

僅か五円で人情つなく葉書のやりとり訴へて
みたり訴へられたり

歌の話をするときだけの昂奮よいつもいつも
は暗い心よ

心臓の鼓動をはからず齢（とし）云々（うんぬん）にて老人組にさ
せらるる我れは

老いおちぶれても清女は気焔をあげにけり『
駿馬の骨でも食（くら）へよぼんくら』

非水図案の煙草『光』の空箱が霜路に落ちて
あり一點の朱

技の長けし人に用なき時代の風生きすぎたり
と老匠なげく

福澤桃介を偲ぶ

國の進歩と歩調の合はぬ電気事業福沢桃介あ
らばと語らるる

電気事業また民営となりにけり福沢桃介の意
志どほりとなる

競争なき官営にうつるを危みしが果して君が
明に違はず

電気事業いま紛擾に陥入りたり統べる力のな
き人ばかり

百年に一人出てくる事業家と福沢桃介を褒め
る人あり

君が遺産は支離滅裂となりしかど日本水電君
を忘れず

養父諭吉が偉大なるためその為に君気圧さる
る感なきにあらず

昭和二十五年作

虫の音

自巳完成を急ぐ心は我れのみか鳴く蟲の音もそれにきこゆる

連続的に鳴くはこほろぎそればかりが耳につく夜の独居（ひとりゐ）なりけり

窓の灯に來りて鳴ける馬追を捕へて放つとき禪味に触るる

灯影させば擦硝子戸は真珠の伸べ板そこにすがる蟲青く美し

馬追はただ一点の青さなり秋にふるへる長き
触角

絶々に蟲は聴くべし縷々として或は聴くべし
我が呼吸(いき)の如

馬追の鳴く音に在所(ありか)探したり窓の灯あかりに
その青き色

あまりにも近く鳴いてゐる蟲ありて我の心は
落ちつきがたく

窓になく馬追ひたやすく捕へたり秋夜の余興
といふにあらねど

皎々と月かがやくを知らざりき蟲を捕へて外(と)
に放つまで

声あるもの必ず人に聞かるるか否かよ虫の声々そろふ

遠うべなる虫の声にも耳すませ煩悩たつれば凡てがきこゆる

、虫の音にきき惚れてゐる至純境今こそ我は超俗の人

衆愚に悩せらるる人もあり蟲あまり鳴けばうるさき野の家

、生きるとも死すとも我れの心身は救はれ難きを虫聴いてゐる

、わが苦しさは我に矛盾がある故ぞ一心に虫は鳴いてゐるかな

生れ代つて來る日に遂ぐる逃避心現つ孫々と
生きてゐるのみ

モリジアニは餓死をしたりけりなぜにその真
似我れに出來ぬか

賣れる様な絵を描かざりしモリジアニその一
徹は死よりも重し

かの時代モリジアニをば餓死させて今礼讃の
何のことぞも

衆愚に愛せらるれば時代の寵児時代を超ゆれ
ば餓死当り前

高原は昼さへ蟲が鳴いてゐる午後の空には白
き月あり

今日の事明日はもはや忘れゆく今虫の音にき
き惚れながらも

滴だたぬ虫の音さへも耳に入る秋なりければ
山家なりければ

野は広く空また遠き山家ずみ虫ばかり近くゐ
て邯鄲の声

邯鄲は昼を鳴く虫見えねども在所(ありか)も知らねど
聞かまほしき声

山の家に独り臾くかげ灯にたつや草にや立つ
や昼夜の虫の音

世を捨てしといふは形の上ばかり蓮月を見よ
名士と談ぜり

娼婦の様な手紙をかいて送りたし戯（ざれ）ごといは
ねば人生憂欝

凡人我れの考へることの浅薄さ厳となるとも
浅薄のまま

枕近く鳴いてゐる虫うるさしと憎まむほどに
我が自我がある

釈尊は天地の声を聞きたりし我に聞こゆるは
虫の音ばかり

紅蓼と露草の花が庭の草紅紫の色わけをつな
ぐ葉みどり

我が知識なんの進みもあらなくに虫の音ばか
り委しくは聞く

我が心と同じき心もつ人と虫きく夜のあらば
やいかに

人みなに憎悪を投ぐる独住みましてこの身も
消えたきばかり

所詮男女はかたき同士に生れしか相寄りし者
憎みゐるを見よ

人らみな金欲しげなる顔に見ゆ我ばかりかな
歌に夢中の顔

世を憎む心をもちて貫かむ諦めてしまへば凡
婦となるのみ

時代の風

街にくれば時代の風が吹いている映画館の前
のこの人だかり

安っぽい戦後日本の印刷と俗悪の絵に時代を
怒る

宣傳美術一向に進歩のあとはなし斯界の人を
嘆かしめをり

食べるもの着る物漁さりの人たちが往きつか
へりつ銀座は賑ふ

生活のために生活する人ばかり命のさびしさ
知る人ありや

銀座ゆく人はなに見てなに思う高き理想を持つ人ありや

一片の紙屑路上に落ちてゐる飛ぶひまもなく踏まれ踏まれて

風船売りの風船の面にぽつつりと天の日輪うつりてゐるよ

繁華街のこの群集に拘らずふらふら浮いてゐる風船を見よ

街の繁華のその雑然たる色彩に陽はただ白く風船にあり

群集は日の在り所を忘れてゐるましてや風船玉の陽を見ず

富める夫をもちたる彼女の驕りにも世俗は寄
りぬあはれ世俗は

ちつぽけな名誉と小(ちい)さな贅生活そんな事さへ
話題にのぼる時世(よ)

厨女(くりやめ)我をさげすみ給ふな土間におく青菜に花
茎たちくる春を

厨女(くりやめ)は時代の風をよそにしてほとばしる水に
春水を掬(むす)ぶ

手袋をはめて盗みの仕事をする指紋をとらせ
ぬ時代の盗人

盗難にて刑事出入りする我家のこれも時代の
風の一陣

竿の割目に一夜溜りし春の雨洗濯掛ければは
らはらこぼれる

廣き家の戸締りをして厨女（くりやめ）の我が打つ今日の
終止符かこれが

女われ学を学ばず学にて立てず飯たきをして
夫にたよられ

学問にて立てる境遇に置かれたる清、紫羨ま
しその非凡さへ

頭の中には偉大の人をおいてゐて我が一生は
何もせず終る

天窓より月天心をのぞくなど厨をみなの視界
の狭さよ

星光も見えぬ闇夜を我が庭の櫻満開が占めた
る夜明り

櫻咲きぬ椿も咲きぬ我が無爲の生にも理屈を
つけよと考ふ

さくら花先きに咲きしはもはや散る枝には群
るる花ありながら

無限無数の花の密集さくら花しんしんとして
何を默示す

蒼き空ましろき櫻ぴつたりと触れて距離なく
瞳にうつる

花びらの五瓣がくづれ初めぬればただ片々の
姿に変る

アラビヤンナイトを読みつつ居れば夢いだく花
は化身が君はいづくに

花瓣を散らしし跡のうてなには花の匂ひが殘
れとばかり

＼ひそひそと櫻の花の私語(ささや)くを聽いてゐるかな
詩(うた)つくる人

＼空に見し物を地上に踏むといふ僞りならず今
朝落花踏む

＼天つ星おちたるとしにあらねども落花の点々
にあけの光す

＼細字(さいじ)なる我の手紙を君よみて疲れて春の愁ひ
を知りませ

坂口謹一郎博士の学士院賞受賞を祝す

ひたすらに究め給へり凡俗を超え給ひたる命
の輝き

非水画香魚の図に題す

銀鱗の小走る見ればこれほどに清きものやあ
る水と光と

昭和二十四年作

零落自画像

翠子（みどりこ）の匂ひはこれぞと君に注ぎしペッパーミントに思出多し

彼の宵よよよろめく君を支へたりしをみなといへど繊手にあらずよ

翠子は死にたりとおぼせあの夜の爪くれないを君な忘れぞ

翠子の情熱とかすみどりの酒君にし注げばグラスの光

血統（ちすぢ）我に至りて貧に零落す母もせざりし飯た
きぼろつぎ

下水（どぶ）掃除に蚯蚓堀りだすこのやうなことする
我を君見給ふな

生き過ぎたりとの思ひの歎き下駄の緒の切れ
てつまづく瞬時の感にも

屑炭をかき集めつつ貧すれば五本の指をまつ
くろにして

ミレー、ドガのクロッキーに見るガラスのよ
ごれ誰も掃除をしないこの室

ダイヤモンド出さぬ者は非国民今どこを吹く
大罪の風

安菓子をうましなどといひて味覚をばあざむくこころ貧に落ちつく

千冊をつめし書架の書まばらになりて倒れやすきにも呪ひの音きく

目の前に金を揃へる腕もなくぼろつぎ足袋つぎと家妻はあはれ

老いおちぶれし我を訪ねてくる人の帰りの背中に投げ接吻すれ

窮すれば君が膝下にひれ伏すと命にたのみし桃介は死す

氣が狂ひて福沢駒吉自殺せり千万長者の世継ぎながらを

考へざりしことなりしかなこの我れがいかにしてさて食うべきことなど

橋の上の乞食婆あを見て思ふあすこまでおつるにはまだ距離がある

死が解決する

歌に生き歌に死なむの山家ずみ明けても暮れても虫の音ばかり

春の鳥は恋にや鳴きしいま秋の鳥はついばむ木の実草の実

室にゐてもすでに逝く秋身に沁みる打たざる
蠅の死骸を掃きつつ

今宵鳴きてあした死ぬる虫の音(ね)に涙惜しまぬ
処女性を今も

君よ我が死ぬるその日は石拾ひ石の肌に歌か
き投げませ

今生(こんぜう)の争ひといふも死が解決するさはれ今井
邦子よ悲しき

菊池寛あのやうな寵児が急逝する天の采配か
悲哀か何か

世賢に裁かるるより遂のはて死が一切を解決
するかな

〽絵かき歌つくり生存競争に負けながら浅間の
山を我が物とせり

〽我が歌に人のひとりを泣かしめなば老いても
枯れても腐りてもよし

春恨めしき

〽世を恨む身にも春來て現は悲し蝶の翅には
花の香うつれ

〽まのあたり人を見むより憧がれて胸に久遠の
おもかげ秘めつつ

をみなごはひそかごとをば楽しみの深夜の鏡
に向ひて顏みる

をみなごはそとに向ひて云ふことと異なるもの
を秘めて悲しむ

丸枕のくくりに垂るる總糸に春夜の灯かげを
見つめて醉へる

男らにかへりみられぬ老いが來て少女のとき
の聖女に復へる

母と呼ばるる人間愛は知らねども天地の神祕
に觸れにけるかな

誰の唇にも与へざりける乳房は我れの死骸に
美しくあれ

土深くシャベル突込めば春光の閃めき我が手
我が脚にあり

遠うべなる八ヶ嶽ほの白皚々空気の層にて蒼
味に見ゆるも

生きねばならず

祖国はもとより貧なりけりと諦めの目にこそ
うつれ小草の白露

人間五十年それより重ぬる歳々は春にも秋に
も死を忘れざり

、生（せい）に云はず死後のちかひに言（こと）多くなりにける
かな完成のため

、月光は麓が原に照り渡れ我の詩魂は天地の塵
かも

、泌みいづる水いつしか石に苔つけぬ夢ならぬ
ものもこの世にあるかな

手をひらけば五本の指のことごとが我が生活
の保證に見ゆる

米を洗ふ五本の指の水づきに冬こそ來れ爪く
れないに

小指の先きにインクのしみをつけてゐる生活
のほかの訴へを持ち

犬猫のごとき生活(くらし)と怒る日は跳ぬる蝗(いとど)も邪険に掃き出す

公団の卓にうづたかきものを見よ軽んじられたる紙幣の果を

生活のいのちの屑と投げらるる皺くちやになりし百円の札

米を負ふ背のリュックサックの下垂(したた)れに呪ふ生活の重さがあはれ

金銭に縁なき我の一生か抽出いつぱい歌反古ばかり

遠景は雲一片なく晴れにけり見馴れし山々よ我また凡々

一つの鍋ぶたに幾つもとまれる蜻蛉の列に親和の心ありやと思ふ

木の葉が降る風が降らせる木の葉なり寂に入る前のせわしさを見よ

考へさせらるる時世にしあれ枯原に草の実ついばむ小鳥を見ても

生きるといふことは即ち食べる事なりと初めて知つたやうな驚き

強く生きるといふ言葉はあれその強き生きかたといふを誰が教へし

人を押しのけ。おのれが先きに面照らすこれはも強き生き方なりや

中島 新の戰死を悼む

君燃ゆる詩魂を遂げず死ににけり悲しみきはまりて憤ろしも

遂げざりし君が詩魂を誰かつげよ中島新の死を活かしめよ

いかに寂しく死に給ひけむ臨終を想像すれば胸かきむしらるる

英靈が帰り來れるといふことあり中島新もその人にてあれよ

なんぞこれは中島新が死にける證なりけり歌集「野天」は

昭和二十三年作

時代無情

私有財産制肘をうける法律に会はずて富める
兄は逝きにし

侯爵夫人行商を始めしかば我が歌三昧のあし
もとぐらつく

生れて初めて鍬とりし日の抱負などいづくに
ゆきし年々凶作

痩せ肩に推肥をかつく辛さにて何を知りしや
農事の平凡

私有財産の調査完全と思へども訴へし盗品いづることなく

年々歳々いもを作りて食べながらここは異郷そここにては死なじ

雲霧の流れ去りたるあとの樹氷の輝き氷の管ぬく細き枝々

見渡せば向つ全山樹氷のかがやきこの氷原に貧しくくらす身

深雪を踏みつつゆけば雪くづは靴底に入りあならうらを刺す

雪堀りし穴は梢の雪しづく枯林も春にゆり動かさるる

我が病みしばかりに米が足りしといふ時代の無
情は今更ながら

折紙包み開いて見れば十粒の米いつの日どこ
にて拾ひし米か

君も老いを告げて來給ふ平凡も非凡も天地の
呼吸に巻かるる

ガンジーの大愛さへも悪まるる命と命の軋轢
かなしく

千年たつた一人の出現と聖の命光芒を曳く

ああ神よといまはのきはの一言はまさしく天
に應へたる声

聖の目には神がうつるに凡人我れはこの俗世
に何を見てゐる

個を護る命は安し個を出でて向へば草木も戦
場のもの

陽も土も

陽も土も小鳥の声も春を呼ぶかなしよ我も地
上のひとり

落つる陽を呼びとめるがに鳴く小鳥震めるま
まに大地は夜に入る

鳴け鳴け春の百鳥悲しくて鳴くにはあらず命の
叫びを

夢にみし人の面わの記憶よぶあはあはしかも
朝月のかげ

春のくる氣配は皮膚の感覚に今朝はあかぎれ
の血が滲れてゐる

村の媼におん身は何が楽しきやと聞けば答へ
ず呆然とする顏

夏草に夢なし

若き日の翠子（みどりこ）覚えてゐる人のひとりしあらば
ほほゑみて死なん

ひとむきなりしさはれあまりに淨かりし若き翠子(みどりご)
誰が目に描がかれ

貧は淸し貧に生きむと憧がれし明治をとめの
翠子なりし

麓が原土の限りの草々に風の傳はる夏とはな
りぬ

生(お)ひたくましき夏草原に夢もなし陽に盛んな
りかほちやの花は

黑髪に白髪まじればをみなごの位ゐおとして
愚になるのみ

貧に生れ貧に育ちし思ひ出のなき人現世(げんせ)に虐
げられをり

血あるにあらず涙あるにはあらねども深山すずらん我が手に匂へり

太陽が雲に入るとき草香らむこのとき天地の呼応を聴くかも

裾山の蔭りに浅間をうかがへり我に隔たる山はも人はも

生きてゐるより死んでしまつたはうが仕合せと思ふ生物は人間ばかり

浅間の秋

春秋いくとせ我を泣かしめし火の山の浅間がとはに秘むるは何ぞ

火の山の浅間の黙示解きあへず時たちぬれば
涙も冷ゆる

戦ひし悔みはひとの子に残れもみづり果てて
冬に入る山

浅間山の草本帯の代赭色秋は我がふところに
も山のふところにも

葉ごもりに夏をひそみし蟷螂が今やまばらの
葉を渡りゆく

ものかげにかくれ或はあらはれて蝉は秋をさ
びしみもせず

國のあやまちはその人が負へ我はただ民主ま
つりごとによみがへらむとす

リベラリズムを自由主義と訳ししが時に自主
自宰としてもみし　福沢諭吉先生を思ふ二首

自由とは我侭の意にあらずとの福澤諭吉の至
言を活かせよ

昭和二十二年作

雪魂賦

麓が原果てなく雪に埋るるとも我に安眠の家
ありにけり

天地のくぎりも見えず空間の一切の物に靡々と雪降る

天地を織るがごとくに靡々と降る雪片切るるところはなしに

朝は昼となり昼は夕べとなるまでも降りやまぬ雪に夜天を探ぐる

一と夜さの吹雪がつくりし雪の塚我が霊魂を祈るといはめ

雪原はなべて平らかと思ひきや墓の如きの雪塚さびしよ

風吹くや風脚すなはち残るなり波型彫(ほ)りし雪原の上

戸外尺余の雪踏むべくもあらざれば鍋も茶碗
も雪の上におく

雪にこもれど我も社会の人なりけり人声がす
るよ郵便來れる

飛んで來ても一声も鳴かぬ冬の鳥雪地（ゆきぢ）の上を
ただあさるのみ

頬白の幾歩のあゆみ雪づらにやさしきあし跡
を殘して去りぬる

百日（ももか）の後に來る春まではとけぬ雪生（い）きのいぶ
ぎの地（つち）封ぜらるる

青芒穗すすきついに枯れ芒雪に折らるる涯（はて）ま
でも見し

古雪の上にまた降る新らしき雪にも眼を張る
驚きのあり

凡人なれば白一色の幾日に悟りもなけれただ
雪がある

浅間山天に應ふる白一色雪は凡てを鎖しける
かな

雪は雪を重ねたりけり新雪と古雪のけじめも
目にはかりあへず

明けて暮るる目の前の雪にこもりゐの日数か
ぞへて無爲にくらせり

物置に薪(たきぎ)をとりにゆくときも雪靴を穿く山家
ずまゐよ

はしためがあかぎれ膏薬はりにしが今の我身
がするべくなりぬ

おほ母も母も婢僕をつかひつつ婦道がなんの
と笑止の至り

擦るマッチ炎となりて焚附けに燃えつくまで
は寒魔に責められ

あかぎれの痛き今宵は唇に手を當てにつつ寝
てしまひけり

寒魔と戦ふ炭と薪(まき)との武器さへや貧しき我の
乏しさかなしよ

小指の先きみなあかぎれの血がにじむ寒気が
刺すかよ針より痛く

眠ることばかりがたのしみのこの我に愚人の夢を問ひ給ふなよ

彼の品よりこれが安しと買ふて來てためいきをつく生活なりけり

雪五十日白一色にあこがれの土見ず踏まず小我に捕はれ

道と田畑の境ひも雪に埋もれぬどこでも踏めよと雪を蹴りつつ

雪と氷こほりと雪のいてみちを踏めばかゝつかゝつ寒（かん）を切る音

尺余の雪を掘り下げし轍を見よ人の生活はけだし埋れず

この下に畑（はたけ）ありとも踏みしあと雪原ぬける近みちなれば

さながら巨人のごとき足跡を我に見ることがうれしよ雪踏む

み冬いま大地もろもろをとざせども雪の下なる水のせせらぎ

雪の浅間をそがひにしつつ道半里たどりし村もみな雪の家

雪の村に雪靴穿いて何の用米を貰ひに來りけるかな

非水描がき翠子歌かく絹本と米の二舛と取かへにくる

我が瞳が俄かにひらく思ひがする雪を見て來
てこの暗き家

かの絵家は畳の上に死にしかど食足らざるが
死のもとゐとは

茶碗ひとつこわしても無に入るといふこの寂
しさを知りそめにけり

貧と老の境涯に入りしこの我を凍れとばかり
か雪の浅間は

一切れの肉勿体なしといふ言葉あまりに貧に
落ちしに怒る

雪に曳く裸木（らぼく）のかげのまぼろしに現つ我が世
をはかなむ事ども

日のうつり刻々とやまぬ寂しさよ雪にひくか
げ目の前にあり

命終りし枯れ草雪にかげひけば有情無情の感迫
まるなり

目にとまらぬ枯草雪上にかげ曳けば現（うつつ）よりむ
しろまぼろしが濃き

雪の原踏む人もなく暮れゆけり夕べ茜のなが
るるを見む

夕つ陽は地上の雪に燃え泌みて白きを桃色に
染めてもさびしき

雪の下にかくれながらも有る物はあり亡き者
は無し人の命は

、手を合せて拜まむものが欲しきなり山見て陽
を見て雪を見つめて

長かりし冬ごもりかな雪とけて忘れゐにける
空罐出でくる

、高処(たかど)なれば雪げの水もせせらぎぬ潺々(せんせん)と聴く
春くる鼓動を

昭和十三年作

福澤桃介哀悼の歌

神を頼むを愚(おろか)と常いふこの我れが一念合掌す
兄を生かせよ

われ病みゐて君がいまはのめに会はず病を蹴
つて來(きた)れば遅し

長き廊下いくつの室を通るときすでに喪服す
がたの人たち

侍べる人首べを垂れてものいはず列なる幾人目
ざめぬ君守る

東より光線うけし寝台を北に枕をかへて寐た
まふ

これやこの世の最後を礼服の黒紋付き君は召
されて寝台(ねだい)に冷く

兄上よ兄上よと呼ぶわがおろおろ声遂に寝台
にすがりて泣き伏す

冷たくなりし君を守りのこの部屋の空気も氷
れ二月十五日

我が泣く声のそればかりにて靜寂の空気震(ふる)へ
ど君答へなく

床の絵は観音像に掛けかへられたり導びかれ
給ふよみ佛の国に

屏風立てまはして暗く寝たまふ御兄はこの世
の光にそむくなきがら

祈りも賴みも事の一切は過ぎにしかまこと逝
き給ふよみ佛の国に

唇に残れる朱(あけ)の色見れどただかりそめの眠り
にあらず

君が死を極楽往生と人はいへど我はも絶対絶
命の涙

白羽二重の蒲団に変りて白装束いでたちも浄
く俗世と訣別

寝台より柩に移すはをみなの手君が情け（なさけ）を受
けたる三人

三人（みたり）の女の互ひの嫉妬もいま君がなきがら扱
ふに悲しみこもごも

柩の中に珠数と眼鏡と白木の杖と持ち物はこ
ればかりか貧者のごとくに

大邸宅のここかしこに君あらず柩の中に狭く
寝たまふ

君がなきがらを囲む二十幾人の誰れのすすり
泣きか沈黙のなかを

寸分隙なく花をつめたる柩の中に君は臥たま
へど蝶にもならぬ人

風にも當てず護りしみ体（からだ）ひのきの棺に百（もも）千（ち）の
花を褥（しとね）と寝たまふ

花の褥（しとね）にいねます君に黄ばらの花かげ花のた
ましひ御（み）顔に宿る

死は美なり眞なり富も位もなし白羽二重のな
きがら姿

君が死像のまたなく美しきにみな泣きぬ一代
の美男と謳はれしかよ

富みたる兄も死すれば何も持たざる旅立ちこ
の貧しさをなつかしみ泣く

庭の散歩にも独り歩みをせぬ君の杖ひとつ持
ちていづくへ逝く旅

文学少女にて君に逆らひしこの我が今こそ君
が死を歌ふなり

翠子（みどりこ）の贈りし花も柩に入れぬさらばさらばよ
ああ兄上よ

この世の光に君を見む日の最後かやしみじみ
と惜しきおんなきがらを

暗殺を恐れて護衛を頼みし君いまはや狙ふひと
なき亡骸（なきがら）

我がおくりし花には涙のしづくが重したづさ
へ給へ父母在す国

理屈をいひて誰れよりも憎まれし翠子が誰れ
よりも君が死をみつめ泣く

生れし日の無にまた復る無の世界築きし富も用
なくなりぬ

養父諭吉にたよりし君にあらざりけり日本水
電の先駆者たり君は

同じ父母の子と生れつつ兄は富み妹は貧にし
て個々の生きざま

今こそは兄妹の訣れなれ貧富のへだたり死の
前になし

蘭も牡丹も咲かせば深冬に咲くものを帰らぬ
君に捧げて悲しき

西園寺公望と記せる弔花を見るや公への尊敬
君常に語りし

岩崎久弥の弔花は棺側に飾りまゐらす君が事
業を援けし恩人

花に記せし政界財界の巨星の名、名、生きた
る人は斯く盛んなり

捧ぐる花の凋まむただちに千金は消えても惜
しからぬ富も世にある

千を数ふる弔花の花輪や花束や二月の邸内弔
花の爛熳（らんまん）

この世の空氣に觸るることなき君が躰(からだ)は永久(とは)に開かぬ扉(と)に納め葬る（ミーラ式埋葬）

君眠る棺の上には太刀おきて鐵盤の蓋(ふた)する死のみ扉(と)かな

地球の滅ぶる日までも君が肉躰のそのままにあれ死の庫の中に

香をささげ花を手向けてはや用なきに立ち去りかねぬ君がみ墓べ

門衛おきて住ひし君は地下の眠り野をかける鳥が墓石に糞する

、ありありと君がおもわの立ちくるに現(うつつ)は悲し眼の前の墓

熱き涙かくもまなこより流るるとも君を呼びかける力だになし

み墓べに往き逢ふ人もなかりけり一禮瞑默ただちに去りけむ

門衛に來意(らいい)を告ぐることもなく誰にも末よの奥津城どころ

富みたる兄に貧しき我の白眼視それも浮世の夢と過ぎたり

君が使用人よりまだまだ貧しき我れなれど僕(しもべ)にあらずよ杉浦翠(みどり)は

生るる前も死にゆく先きも知れずして一世の事に凡人嘆く

ヽ霊魂のありやなしやも知りがたく天地の悠久
に生れては死す

人間最高の生活もなんぞいまここに石に彫ら
るる福沢桃介

あとがき

この歌集『生命の波動』の異色というのは私の生活逆転の相が歌はれてゐることです。

思へば私の夫は画家です。この職業は生活向上を目的とするものではない為に、多くは貧乏です。にも拘らず、私は歌あそびをしてゐたのも、私に背後の経済力があつたからです。（仰山な言ひ方ながら適当な言葉見あたらず。）ところが、この戦争でそれらを全部失つたわけです。それでこの事を私が愚痴ると、私の境遇をよく知つ

てゐられる歌友村野次郎氏が『それは今までが間違つてゐたのさ』といはれました。全くこの言葉には頭を下げました。今日私はいかにこの間違つた過去の生活を清算すべきかの努力の日日なのであります。而してそのやうな発心が新たに蒔かれた種子であり、それが実つたものがこの歌集の歌であります。

私が今日までもあの間違つた生活を続けてゐたら私の短歌は行詰つてしまつたのです。

小説ならば作と作者とは別々になつて、或る舞台の上に色々な人を作り踊らせるのですが、短歌は独白文学です。歌人はそれ自体が役者なのです。故に平坦無事の舞台にばかり踊つてゐたら藝はつき

てしまいます。古來万葉集あたりから考へても、名作といはれる歌は異常な舞台の上に、極致至情感をもつて歌つたものに限つてゐます。故に、

啄木、節、子規にしてもあのまゝで長生きをしたならば、やはり行詰つたでせう。またあの歌人たちも不治の病という平坦無事を破つた逆境に逢つてから、自己凝視に入り、こゝで人間味が現はれて初めて人間的短歌をなし得たでせう。

古來女性の歌うところにして私のやうに生活を歌つた者は少いのです。否あります。だがそれらは『美的生活』を歌つたのです。私のやうに『生活の真』『生活の赤裸』を拓いた女性はありません。

軽井沢には別荘夫人が多く、この女性たちの幾人もが今度の戦争に於ける経済犠牲者です。貯金があつて一生涯食べられてゐた夫人です。ところが昔の金は昔の時代に於てのみの光り、昔の貯金や株券が今日の二百倍三百倍の値上り物価と額面が同調したわけではないのです。

かよわくて自活能力というものを持たない女性というものには、蝗やばつたが与えられてゐる保護色というものにたよつて生きてゐるのと同じ生き方、つまり財産をたよつてゐたのです。ところが戦争はこの保護色なるものを全部奪ひとつてしまつたのです。戦死ならそれで『終り』ですが、保護色なしで生きねばならない辛らさ、

これが戦争に於ける経済犠牲者なのです。これは私ばかりではなく国が敗れると共に生きながら葬られた国民の姿であります。

文学の使命といふものは、横には正史を時代を叙し、縦にはその時代の人物が何を悲しみ何を憤つたかを貫くたていとの即ち縦横の糸の交錯をもつて織りなしたものだと思ひます。

小説にはその使命を果した作品が数々と創作されてゐますが、短歌に於てこの使命を果したものは甚だ少いことだと思ひます。

『生命の波動』の歌はこの敗戦国民の相を幾分なりとも歌つたと思ひます。但し、貧乏を歌つたというのではなく、貧乏の歌ならば、杜甫、憶良、良寛などの先輩がゐますが、私のは祖国の転落に添

うた自已零落のすがたを歌つたというところに前例のない異色をもつたと思ひます。

近頃読んだ中に『詩の扼殺者、高桑純夫』の文章の中に『もし国家が、真の詩のすべてを破壊してやろうといふ計画を立てるならば、千人の役人詩人に俸給を拂ひさえすればいい。それでもう目的は達せられる。国中はたえまなく低級な詩で充され、眞の詩はまつたく不可能になることと受合いである』（キールゴール）『瞬間、三七ペエジ』

この言葉は実に戦後日本の藝術界の弱点をよく捉へてゐます。私はいまこれを歌壇の墮落に遺憾なくいへると思ひます。今日の歌作

りは、眞の詩を生みだそうといふ藝術的良心は稀薄で、名を売るためにの奔走で、大家から忘れられない為の腐心の生きざまです。一方『床屋俳句』といはれるやうに、短歌もまた短歌の手軽さが文学青年をあやつるに程よきものであるからに、歌学も知らない無学歌作りが非常に生れて『家患の力』なるものを以つて、砂上の塔を築いてゐます。それが爲に、真の詩は踏みつぶされゐる現代歌壇であります。高桑氏が『教會堂の数が増すほどにキリスト教は喪失する』といはれたやうに、短歌に対する出版物が多くなるほど、真の短歌は埋もれてゆきます。なほ、同氏が『偉大な哲学者たちはいふに及ばず、最大な藝術家たちは常に最大な逆説家だつたと思ふ』とい

はれてゐますが、歌壇には一人の逆説家が出でず、子規教学と万葉歌学との慣性に反逆する誰ひとりがない。この一事と、名を売る歌人と、無学の歌小羊とこの三位一体をもつて、短歌は第二藝術に墮されるまさしくの現代であると思ひます。

　短歌は私のやうに貧乏ひまなしで、家庭人で広い社会を知らないもの、才学のないものが、何の宿命か、文学愛好の念にかられて已むにやまれぬ心持ちを訴へるに好適な器でありますが、これと反対な好條件を持つてゐる人は須らく散文の世界に、或は絵画の世界に征かれることでありませう。芭蕉が「無爲無能にしてこのみちによる」といつたことは、決して謙遜ではなかつた、とばかり思ひやる

ほど、私もさう感じながら、不遇な私の文学生涯を歎きながらこのペンを擱きます。

　この歌集の印刷は、財団法人孔版技術研究所の厚意によるもので特に同所の技術面を担当さるる「多摩美大」出身の小谷博貞・吉本時昌氏及び常務理事、大門八郎氏等が、杉浦非水のために、尽力を尽されて制作されたものです。おかげでこのやうな見事な歌集の出來栄へを有難く厚くお礼申上げます。

昭和二七年四月

杉浦翠子

昭和二十七年四月十五日印刷　定価（実費）貳百円
昭和二十七年五月　一　日発行　要 小包送料

編集兼発行者　東京都澁谷區伊達町一七　杉浦朝武

印刷者　東京都新宿區矢來町七四　孔版技術研究所　大門八郎

発行所　東京都澁谷區伊達町一七　藤浪会
振替・東京六二二五二番